

招かれる人、選ばれる人

マタイによる福音書22:1-14 / 李正雨牧師

福音書を読んでみると、たまにイエスさまの言葉が厳しいということを感じることがあります。

当時の状況や文化などを考え合わせても、イエスさまの言葉があまりにも厳しくて、この時代の人々が受け入れにくいところがあります。信仰が深い人は、裁きの言葉の中でも恵みを受けることができますと思いますが、そうではない人もいますので、人によって、イエスさまの言葉が厳しく感じられると思います。今日の福音書も、読者によって、異なる印象を持たせる言葉だと思います。このような言葉は、読者によって受け入れ方が違います。特に、すべての状況を客観的に見ようと努めている人にとっては、今日の福音書は、気になる言葉になってしまうのです。だから、今日の福音書を理解するためには、事前にいくつかのことを念頭に置いて福音書を読むべきです。第一は、この福音書は誰のために書かれたものかということです。この福音書は、初代教会の中で、マタイの共同体のために書かれた可能性が高いのです。つまり、キリスト教に改宗したことによって、迫害される人のために書かれたものです。その共同体を慰め、励ますために、今日の福音書が書かれたということを念頭に置かなければなりません。第二は、今日の福音書のたとえば、天国のたとえだということです。天国は、どんな人で構成されるか、神さまは、誰を天国に入れられるかについて書かれたものです。当時のユダヤ人たちは、より詳しく言えば、ユダヤ教徒は、天国は自分たちのために準備されたところだと思っていました。しかし、イエスさまのたとえの中で語られた天国は、ユダヤ教徒だけで構成されたところではなく、むしろユダヤ教徒ではない人々が入るところとして描かれています。第三は、当時のほとんどのユダヤ文学がこのたとえと同じだったということです。今日の福音書のたとえば、裁きを連想させます。イエスさまの時代には、イスラエルの内に神さまの裁き、神さまの国の到来のような黙示文学の思想が広がっていました。一方から見ると、数百年の間、多くの国によって支配と干渉をされたユダヤ人たちにとっては、この黙示的なものは、当然のものになるかもしれません。神の国が到来して、すべてのことを裁いて、変化させること！これがユダヤ人たちが望んでいるものであり、これによって、イエスの以前の洗礼者ヨハネのような預言者たちがスポットライトを受けたようです。このようなことを念頭に置いて今日の福音書を読んだら、今日の福音書を理解して、受け入れることはできるのだと思います。

今日の福音書は、先々週と先週に続き、イエスさまが祭司長たちと長老たち（ファリサイ派の人々）におっしゃったことです。イエスさまは、彼らにたとえを通して天国と天国に入られる選ばれた人が誰なのかについて言われます。このたとえは、前半と後半に分かれています。前半は、次のとおりです。ある王が王子のために婚宴を催しました（2節）。そして、自分の家来たちを送って、婚宴に招いておいた人々を呼ばせました（3節）。しかし、招かれた人々が来ようとしないと、王は、別の家来たちを送って、婚宴の準備がすっかりできたということを知らせます（4節）。それにもかかわらず、招かれた人々は来ませんでした。彼らは王の招きを無視して自分たちの職場に行き、その上に、自分たちのところに王の招きを伝えにきた家来たちを殺すことまでしてしまいました（5～6節）。このことで、王は怒りました。そして、自分の招待を無視して、自分の家来たちさえ殺した彼らを裁くために、軍隊を送り、彼らを滅びさせ、町を焼き払いました。ここまでは、イエスさまのたとえの前半です。

たとえの前半の内容だけを見ると、招かれた人々の間違いもありますが、王の罰もやり過ぎだと感じられます。さらに、たとえでの王は、まるで神さまのように描写されているので、神さまを裁きと恐怖の王として考えることもできます。しかし、このたとえが迫害されていた人々のために書かれたということと、当時のユダヤ文学のスタイルのことを念頭に置いて読むと、ある程度は、理解することはできると思います。そして、私たちは必ず、婚宴へ招かれたということが何を意味しているのかを、考えなければなりません。招かれたという言葉を通して、私たちは選ばれた民族、すなわちユダヤ人を思い出すことができます。神さまは、ユダヤ人たちをお選びになりました。そして、ユダヤ人たちも、神さまを自分たちの神として仕えるにしました。この関係を、今日の福音書では、招いておいたと示していますが、この関係は、契約の関係だと思えます。実際に神さまは、ユダヤ人たちの祖先であるアブラハムと契約を結びました。

創世記15章17～18節では、神さまとアブラハムが契約を結ぶ場面が出ています。

「日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。

その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。」

この契約の中で、私たちは、特別なことを発見することができます。それは二つに裂かれた動物です。なぜ神さまは、二つに裂かれた動物を置いて、アブラムと契約を結んだのでしょうか。これは、古代パレスチナの契約方法でしたが、現代の神学者たちは、動物を二つに裂いたのは、契約違反時にはこの動物のようになるという意味だったそうです（Word Biblical Commentary「創世記1」）。これは人にも適用されることではありません。神さまにも同等に適用される契約でした。私は人間と同等ではない神さまが、人間のために同等な契約を結んでくださったということ自体が恵みだと思います。人間と同等な契約を結んでくださった神さまは、契約の後、この契約をアブラムとその家族の体に刻ませます。それが割礼と呼ばれているものであり、この割礼のしるしがある人は、神さまに契約の履行を求めることもできるのです。創世記17章11節です。「包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの間の契約のしるしとなる。」

旧約聖書で「わたしは神、あなたの父の神である」という言葉がよく語られていることをご存知でしょう。この言葉は、神さまがご自分の民に、自分と契約が結ばれているということを示すときに言われることです。そしてこの言葉の後には、いつも神さまの救いがありました。アブラムの人生だけでなく、モーセの出エジプトと捕虜になったバビロンからの帰還にもこの言葉がありました。神さまは十分に契約を守られたのです。ところが、今日の福音書では、招かれた人々が来ようともせず、さらには、続いた招きにきた王の家来、つまりイエスさまを含めて、預言者たちを殺しました。契約の違反だけでなく、違反が続いてきたということ、イエスさまは指摘なされたのです。そして契約違反による結果があるのだと言われました。ここまでがたとえの前半の内容です。

そして、後半はこのように始まります。8～9節の言葉です。

「そして、家来たちに言った。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』」

王は招いておいた人々はふさわしくなかったと言います。そして婚宴によって、すなわち天国を他の人に満たせるのだと言います。この言葉を聞いた家来たちは、通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も区別せず、連れてきます。ここでの悪人は、を犯した人として解釈されることがありますが、律法が悪人だと定めた人々として解釈することもできます。徴税人、娼婦、羊飼、汚れた病にかかった人など、律法が汚れたと定めた人々です。家来たちは、このような人々も婚宴に連れてきて、婚宴は客でいっぱいになりました。

これは、天国に入ることができる人は、ユダヤ人だけではないということを示していると思います。

神さまの招きに応じる人は皆、神の国に入ることができるようになりました。既存の契約は破れて、新しい契約が立てられたのです。律法は、もはや、人々を拘束することができません。罪は、これ以上、私たちを支配することはできないのです（ローマ6:14）。使徒言行録2章21節の言葉のように、主の名を呼び求める者は皆、救われるからです。ところが、イエスさまはたとえの最後にこのように言われます。

「招かれる人多いが、選ばれる人は少ない(14節)。」

この言葉の意味は何でしょうか。これこそが、イエスさまがたとえの後半で語りたことだと思います。

イエスさまは誰でも天国に入ることができるとおっしゃいました。

しかし、これには条件が一つあります。婚宴にふさわしい礼服を着なければならないということです。今日の福音書11～13節の言葉には、礼服を着ていない人が追い出されることが書かれています。礼服とは何でしょうか。私はそれが使徒パウロが言った、神にかたどって造られた新しい人を身に着けることだと思います。アブラムが神さまと契約を結んだ後、契約のしるしである割礼をしたように、天国にふさわしい人は、新しい人を着なければならないのです。新しい人を身に着けるということは、古い人を脱ぎ捨てることです。自分の欲望に従って生きること、自分勝手に生きるのではなく、神さまの言葉に基づいて生きることです。それが新しい人を身に着けることであり、新しい人を身に着けた人だけが選ばれるのです。救いは完全に神さまの恵みによるものです。かといって、自分の努力が全く要らないということではありません。神さまの救いを信じる人は、それにふさわしい生活が必要です。救いと変化された生活は一緒にあるものです。神さまは誰でもご自分の国に入られる資格を与えてくださいました。その資格にふさわしい人になるのは、私たち信徒の役割だと思います。神さまの恵みの中で新しい人を身に着ける皆さんになりますように。私たちの生活が神さまにささげるいけにえの香りになりますように、主の御名によって祈ります。アーメン。